

九〇 津田 出

明治三十八年六月二日、すなはち今を距ること三十三年前の今日、紀州の藩老であり、明治維新の傑物であり、日本に於ける徴兵制度の草創者であり、經世家、財政家である以外に學者であり、詩人であり、歌人であり、また書家であつた有名な津田出翁は七十四歳を以て東京麴町下六番町の邸に逝いたのであります、錦鶏間祇候貴族院議員陸軍少將従二位勳一等が、其名の上に冠せられた資格でありました。今、わたくしは敢て有名だと申しましたが、實はこの有名なといふのは、所謂識者の間にのみ有名なので、時代を異にする現代人や、假令舊時代の人も有識者階級にあらざる間に在ては、實は有名ではありません。

凡そ同じ偉い人も、其實質程に持囃されない人もあれば、また實質以上に擔がれる人もあり、前者は主に陰性、後者は主に陽性であつて、甚だ卑しい言葉ですが若し一般的にワイ／＼騒がれるのが得で、然らざるものが損であるとすれば、津田翁は陰性の方に屬し、損の方が得

の方かといへば、損も損大損の大將とでもいふべきでせう。

津田出とは抑如何なる人か、翁に就ては、わたくしは取調べがありますので、翁を最多く最善く知つてをられた岡崎邦輔大人には屢お眼にかゝり、種々お話を伺ひました、他日翁の傳記を編むだ時に、序文を書いて頂くお約束をしながら、そんな暇もなく實現しないうちに、大

津田 出 筆 蹟



常陸女のたわやかひなを夢のごとまき癒し夜はの忘らえぬ鴨

出

人もお逝くなりになり、残念な事でした、其岡崎さんの話にこんな一節があります。

ある時津田翁が、北畠道龍を初め側近の人々を集めて、坐談中に偶人物論などが出た、其時翁は、いつたいお前達の眼から見て、俺を評するにはどういふ言葉で以てするのが最も適當だと思ふか、といつた、皆も流石に弱つたが、或者がまづ「豪傑」と答へた、翁は否々といふので、次なるが「英雄」と答へた、翁は依然頭を振つたので更に「偉人」といふやう

なこともいうたが、まだ及第しない、結局それは「亞聖」と稱すべきであるといふのです。

この話は大変誇張されたやうな気分があり、岡崎さんも笑ひながら話されましたが、わたくしは單に之を誇張妄想のやうに取扱ひたくないので、それは實は津田翁を單的に批評すべく其代表格の名稱に甚困難を感じるので、曩にも述べましたやうに、經世家といへば經世家であり、現に紀州藩の最後の舞臺面には、大達者として登場し、城の崖のうちで采配を振ふといふので、「蟹宰相」と呼ばれた位でありますから、政治家といふに何等の障りなく、また官位は少將に止まつたものゝ、徴兵制度に於ける先覺者であり、功勞者であり、軍事關係から「名將軍」と稱することにも勿論差支はない。また藩の蘭學稽古所の教授であり、校長であつたのでありますから「蘭學者」ともいへます。若くして父の訓導によつて徂徠學を深く究めたので之を「儒家」の部に入れることも出來ます。萬葉風の和歌を上手に詠み、また詩文に長じてゐるところから、之を詩人歌人としても決して恥かしからぬ資格を有つてゐます。それから、書のことではありますが、いつたい、維新前後の志士——明治の顯官になつた多くの人々は、皆書を巧みにせられましたが、しかし、それはたゞ旨いとか、上手である程度のもので、本格的に能筆能書所謂文人に伍し得るものに至つては、さう澤山にありますまい、好き不好きもありませ

うが、まあ徳川齊昭とか、山内容堂・伊藤春畝・犬養木堂・今の西園寺公の如きは、正に水平線を抜いてゐると思ひますが、何といつても此人々のうちでは、副島蒼海に指を屈せねばならぬと思ひます、まことに蒼海の筆致の豪宕堂々たる壓力の前には、おのづから頭の下るを覺えます、その副島と當時併稱せられたのが、津田翁の書であつて、其書風は枯淡にして健剛とでもいひませうか、殊に珍らしいことは、其平假名も亦漢字と同様の風趣を有つてゐることです、近頃流行の上代様のものではありませんが、中々雅韻に富んでゐるのであります、坊間に多く見受けないのは、翁の氣象から、俺の書が分るものかといつて、外部には書いて出さなかつたといふことであります、して見ると「書家」といふことにしても一廉の位置にあります。又翁は晩年に百事を擲つて、大農論を唱へ千葉縣に大農場を數多く建設し、開墾事業を起して之に殘生を委ねたので、之を事業家、農業家であるとも云ひ得るのです。もつとも、翁の此事業はあまり計畫が彪大に過ぎ結果に於て思はしくなく、遂にこれがため、其人生繪巻は失意を以て幕を閉ぢたのであります。

さあ、かうなつて見ると、果してどういふ名目を以て翁を表示することが適當であるか、人名辭書の類で單に「蘭學者」と簡單に片付けてゐる向もあります、何だか物足りない氣持

がいたしますし、しかも、以上述べました各種類のその何れもが、悉く、其第一階級に位してゐるのですから、どうもこれには甚困惑する次第であります。

そこで、翁が門下生などに、俺をどうみるか、どう命名するかと尋ねたことは、必しも冗談半分のみではなかつたのであらうと思ふので、恐らくは翁自身も判定出来なかつたのではありますまいか。

さて、頗る世間的でない、大衆的にお馴染の薄い翁のことでありますから、其傳記や人物評など、まるで傳はつてゐないのかといひますと、又必しもさうでもありません。今、手近の若干の書物について述べてみませう。

紀州徳川近政記

これは明治初年の記録と見えますが、公刊されたものではなく、後に謄寫版になつてをります、殆津田翁一代記ともいふべきで、彼の西郷隆盛が初めて翁を訪うた時、翁は滔々と國家百年の計を説いた、西郷がすっかり其高論卓説に敬服して、御意見はその邊のものかと聞いた翁はなゝに今話したのは僅に日本國內だけの事で、世界の大勢は斯々であると新に説き出して西郷をして更に其博識達見に傾倒せしめた、西郷は翁にして若し内閣に首相として立たば、自

分は其政に従はむとまでいうた、此歴史的會見が、明治四年五月六日山本弘太郎といふ人を介してのことであつたなど、手紙の原文と共に掲載され、また大久保利通・木戸孝允が翁を訪うて、内治外政の意見を聞いたことなどもあり、翁の明治政府任官迄の事情が詳記されてあります、この西郷が翁を尊敬して宰相に推舉したことは、事實でありますが、同時に西郷が之を周圍に謀つて、同意を得ることが出来なかつたため、弟従道をして翁に陳謝せしめたといふことも事實であつたでせう、それはすなはち明治二十八年に刊行された、

大隈伯昔日譚

に、これに關した記事があります。當時新内閣が組織され、西郷・木戸を主體としたが、西郷入閣と共に、其推薦する人物がどうも面白くない、といふ例の大隈流の長廣舌の果にかうあります、少しく読んでみませう。

其中にても何某（現に健在せるを以て姓名を言はず）のごときは、西郷も餘程買ひ被りたると見え、「此人こそは實に明治年間に於ける第一流の人物にして、其才の優に、其智の富みたる、今日逆も之に比すべきものあるべからず、若し太政裁理の重任を此人に委托することとならば余等は喜んで、其後に隨ふて趨走せん」とまで稱揚し、之を大藏省の榮職

に任擧せんことを切望したり、此人に關しては獨り西郷が買取りたるのみならず、木戸も亦之を信用したる模様にて、西郷と共に速に之を任擧すべきを懇懇したり、……

などあり、其人すなはち津田翁の遂に用ふるに足らなかつた事を説いてゐます、西郷・木戸二先輩の推擧を、かく勿付けた大隈一派の眼識が高かつたかどうか、凡そ人といふものは、其位置にあれば其位置の仕事が出来るもので、若し西郷の説が行はれてゐたならば、どんな治蹟を翁が擧げたか、其半生は光明と權勢に轉換したか、或は狷介不羈な翁が、伴食的に廟堂に立たず、數奇な運命に蕭條たる晩年を送つた事が、却て英雄の末路として自然であつたか、將亦それが翁の本懐であつたか、人事茫々猥りに斷じ難しとするのが本當でありませう。

次に

西南記傳

これは明治四十四年の刊行で、其下卷の二に津田出傳があります、藩政時代から明治へかけて説き、木戸孝允が翁を訪うて、兵制改革の談に及んだ時、翁は「我藩に於ては幕府の末期に既に佛國士官の傳習をうけ、精練の軍隊はあつたが、故らに獨逸の兵制に倣つた所以のものは、單り其兵制の精整なると、其軍隊の勇武なるとのみではなく、其國民の氣象精神風俗習慣が、

之を佛國に比すれば質實にして眞摯なるを以て、善く其精神を學ばゞ、得る所尠くないと信じ
てゐるのである」とかう言ひましたので、木戸は「惜しい哉、何ぞ此言を聽くことの晩かりし
や」というて悔んだ、などゝ書いてあります、明治初年の翁の此觀察は昭和十二年の今日に在
ても、やはり首肯せらるるのではありますまいか。

次に

壺 碑

これは、純然たる津田出傳で、大正六年刊行になり、一名三十年不言録といひ、翁の生涯の功
業を、他人の言葉を以て説明したもので、末に文、詩、歌などが収載されてあります、翁を語
り翁を知らうとするものの、讀まなければならぬ書であります。

次に、大正の中頃に

大 東 文 化

といふ雑誌に「蟹宰相」と題し、其事蹟を稍審に記述したものがあり、

次に大正十三年に、下村宏博士が

南 紀 人 材 論

を著し、之に翁を拉し來つて、其功業を説き、徴兵令實施四民皆兵の始祖として、其名不朽であるといひ、南紀に人材を出すべき方法に涉り、「一人の先見の士あり、一の巨人あれば、必ず其跡に幾多の人材相踵ぐ」というて、之を翁の記事に結びつけてあります。

次に

紀州郷土藝術家小傳

といふのが昭和五年に刊行、翁は其一役を勤めてをります。

次に

南紀徳川史

これは十八冊に成る浩漉な書物で、昭和五年から八年に涉つて刊行され、慶應二年五月、翁が御國政改革趣法概略表を上つた其全文なども掲載されてあり、

次に、昭和七年

徴兵令制定の前後

といふ書が刊行されましたが、此書は、大村益次郎・山縣有朋を中心として書かれたもので、各藩の制度を縷述して、土州藩に及んだ次に、かうあります。

併しながら單なる徴兵制度に止らず、進んで士族の常職を解くといふ、大英斷的施設を敢行した嚆矢は紀州和歌山藩であつた、即ち明治元年二、三月の交に於て、藩の執政津田出は、世襲士族の祿制を全廢し、徴兵令を發して、苟も藩民たる以上、士農工商貴賤の別なく、總て兵役に就かしめることにしたのである云々

次に、昭和九年十一月、福澤諭吉記念號として刊行の月刊雜誌

傳記

誌上に、白柳秀湖氏が「福澤諭吉と荻生祖徠」と題して、論議してをられる中に、津田翁に言及し。

翁の藩制改革の綱要は、紀州藩五十五萬石の中、伊勢にあつた十八萬石を、朝廷の御料として獻上する、藩士の俸祿には大削減を加へ、千石のものを四十石、五百石のものを二十石といふ割合に改め、二十石以下は其儘据置き、千石以上は百石につき米十俵づゝを増すといふことにした、この祿制改革のためには、勿論藩士の不平から發する暴動を豫期せねばならなかつたので、彼は士の常職を解き、兵を百姓町人僧侶等のいはゆる庶民階級に募つた

と、極めて簡潔に其要點を摘記し、また岡崎さんが津田翁に向つて、言つた言葉を引いて、

「あなたのやうな維新の改革に功勞のあつた人が、どうして授爵の恩典に浴しないのでせう」といつたに對し「それは至當なことだ、現に明治の元勳といはれる連中は、皆「御爲」といふことを標榜して働いた、或は朝廷の御爲といひ藩侯の御爲といひ、すべて御爲といふことが、彼等の行動の規準であつた、しかし、おれは曾て「御爲」といふことを考へたこともなし、又いつたこともなかつた、おれの行動はすべて「斯民」といふことであつた、「斯民を奈何」といふことであつた、「御爲」に働かぬものが、授爵の恩榮に接せぬのは當然すぎる程當然のことだ」と、かやうなことを平然としていつた津田が、元勳達から、何となく蟲の好かぬ奴として忌憚されたことに何の不思議があらう

と説き、且つ福澤の思想と翁の思想に若干の共通點のあることから、翁の改革の骨子が蘭學の影響であるとしても、それは徂徠學の素地がなかつたならば、かやうな大きな西洋文化の骨子をつかむことは出来なかつたに相違ないと斷じ、犀利なる觀察を施してをられます、もつとも只今述べました授爵云々といふことは、翁歿後に、内々の御沙汰があつたのを辭退されたかのやうにわたくしは聽いてをります。

次に、昭和十年に、松波仁一郎博士が

牛 門 漫 筆

といふ書を出してをられる中に明治維新の二大偉人として徳川慶喜と津田翁を挙げた一項があります、此書は曾て文藝春秋などにも掲載のものを纏められたものであります、其要項を言ひますと

○津田は偉い、西郷・大久保・木戸よりも偉い、彼等三人が偉人ならば、津田は大偉人であるの説

○平山重治郎氏が「明治人物裸像、首相以上の津田出」と題して書いたものや、比良勝彌氏が、「春宵閑話三宅坂物語」と題する中の翁の記事などの引用

○津田と陸奥宗光、津田の婿と陸奥の古長屋、津田の娘と原敬、等の題目

などに涉り、博士一流の諧謔に満ちた筆致で書かれ、翁を推重し、翁の面目を傳へて躍如たらしめるものがあるのですが、爰んぞ知らむ、博士は實は津田翁の女婿なので、讀者が一杯喰はされるといふ寸法、博士にはお目にかゝる度に、種々翁に關するお話を伺ふことであります。

次に昭和十一年、白柳秀湖氏は

歴史と人間

の一書を公にせられ、其中に翁に就て細叙せられてゐますが、大體は曩に雑誌「傳記」に書かれたのに、補修を施されたもので、徳富蘇峯翁は本書の批評をせられた最後の項に『本書中記者の尤も同感をもて讀みたるは「津田出と陸奥宗光」の一節である、不幸にして歴史の下積みとなり了らんとしたる紀州の奇傑津田出をして秀湖君の筆に上りて、其面目を全露し、其の氣焰を勃發するを得しめたるは、是亦た鮮からざる功德とや云はむ』といつてをられます。

だいたい觸目の書物はこんなもので、外に一般人名辭書の類や新聞雜誌の斷片的のものは限がありません、とにかくやうに近年漸く、翁の事蹟が喧傳せらるるに至つたことは、寔に喜ばしいことであり、尙讀々翁の研究者の續出せむことを切望する次第であります。

翁の外貌は、さつと只今までに述べました事柄で、聴衆の方に知つて頂いたと思ひますが尙時間の存する限りまだ申上げてゐない翁の生立ちや、其風藻について述べてみませう。

津田翁は天保三年三月三日、父信徳の長男として生れました、補正儀の後裔が紀州にあるといふことは、夙に史家の傳ふところであります、正儀は河内國交野郡津田の城主であつたので、後裔が津田を氏とし、室町の末に本國河内から紀州に移り、すなはち藩祖入國の以前

からの住民で、世々紀藩に仕へたのであります。翁が楠氏の裔であることは、誇であつたと見え、其藏印にも「贈正三位近衛中將楠公四世河州交野郡津田城主従五位下周防守諱正信十五世裔」と彫刻され、「紀國大夫」「紀藩執政之印」「半生爲政半生農」「山上有山」などといふ印を用ゐ、外にも澤山雅印があります。「山上有山」は出といふ文字を洒落たもので、號を鶯花園といひ、又「芝山」といひ、芝翁ともいひました。署名には「稜威」とあるものもありますがこれは御稜威の「イヅ」の意であります。

翁は十四、五歳の頃早く西洋學に着眼しましたが、當時は洋書禁令のため、中々讀むことが出来ず、やうやう江戸の醫士坪井信道の塾長石垣蘭齋を、紀州へ寓せしめて、二年許り文典理學醫學の類を修め、それから和蘭の兵書を研究したといひます。翁が終生の功蹟の一到に數へられてゐる徵兵の思想の如き、既に此時分に胚胎したのでせうが、今日に於てこそ何でもないものゝ、明治元年に刊行された「藩兵私考」といふ加藤櫻老の著書を讀んでみますると、士農を混じて一にするを難じ、郡縣吏治を末法などと稱してゐます、こんな時代に在て、よくまあ思ひ切つた英斷が出来たものだと思ひます。

また翁が有名な賢君水野忠央に知られ、徳川茂承から破格の優遇を受けたことなどから、其

功業方面のことは、尙山程事蹟がありまするが、既にしつこく申上げましたので省略しますが、其遠大の理想が「利世安民」といふことであり、「世界各國の人類をして、互に戦争し互に呑噬する如き、國と國との戦争なるものを停止せしむること」といふ、人類愛を基調とした世界平和論にあつたことは特に記録しなければならぬ一事であります、翁はこの氣持を「文明の極無神に至り、開化の極無戦に至る、必ず當に日あるべし」と文に綴つてゐます。

翁の徂徠學については、曩にも述べましたが、其作品に「人予を徂徠學者と謂ふ、誠に然り所謂先王孔子の道は、實に徂徠に定まる、予亦之に由り其真相を知るを得たり、但徂徠は仲尼を師とす、故に其高屈を出る能はず、予は仲尼を友とす、其得失自ら判ず、是其異なる耳」といふのがあります、徂徠も聊顔まけの體ですが、なにさまかういふ風に、すべて宏遠な理想の持主であつたことが直感されます。

詩文の類は相當數多く傳はり、また和歌の方の師承は、種々の事情を綜合して、多分加納諸平及諸平の學統を受けてゐる海上胤平から學んだものだと思はれる節がありまするので、海上龍子さんに聞いてみましたところ、やはり初めは諸平に就き胤平と同門であり、後に千世子夫人と共に胤平に就いたとの事であり、翁の詠風は諸平の堂々たる詠みぶりをうけて、萬葉

の古調を帯び、捨て難い作品が多く傳はつてゐます。

尙翁の弟香巖や北畠道龍・岡本柳之助など、翁をめぐる人々についても申すべきであります。うが、もう時間がありませんので、之を以て終りいたします。

昭和十二・六・二（大阪中央放局ヨリ放送）